
カミサマは不器用。

銀劉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カミサマは不器用。

【Nコード】

N8186A

【作者名】

銀劉

【あらすじ】

平凡な女の子竹内伊瀏、16歳。ある日の放課後、家に帰ろうとしたとき、変な男が自分を追いかけてきて・・・？切なかつたり笑えたりする恋愛小説です。

春、出会い。

どうしよう。

今思うのはそれだけで。どうすればいいのかさっぱりわからなくなっていて。許される事ならば学校のマラソンでもこんなに本気で走った事のない僕が、どうしてこう必死に走っているのかを後ろから僕を追ってくる変な男に言っただけ。

事の始まりは30分前に終了した清々しいほどの放課後。部活動に夢中になる人物や、さっさと帰る人。ちなみに自分は後者のほうだが、まあ、今はいいだろう。僕は頑張る高校生達を尻目に悠々と自宅への帰路についていた。はずだったのだけれど……。

「竹内伊瀏サン？」

校門を出た辺りで、黒い外車の運転席側に寄りかかっていた男の人が、僕に声をかけてきた。回りの女の子達はもの凄くその人を見て僕を見ていたけれど、残念ながら僕はこの人とは知り合いじゃない。だって、日本人とは思えない茶髪にサングラス姿。身長は180とかありそうだ。スーツをきっちり着こなしているその姿はどこにも違和感はなく、むしろホストのように感じた。

「……あの……どこかで会ってましたっけ？」

失礼とは思いつつも、おずおずと相手に聞いてみると、その人は薄く笑うとこっちに近づいてきた。ホントに宣言しておくけど、僕はこの人と知り合いなんかじゃありません……!!

「会いたかったよ！！僕の伊瀏ちゃん！！！！！！」

いきなり抱きついてきたその人の行為に、一般人の僕は順応することができず、固まった。石よりも硬く木の根っこよりも深くその場に縫い付けられたかのように動かない自分。本能が告げている。この人は少し危ない人だ！！や、だいぶ危ない人だ！！今この世の中にはびこるストーカーという奴ではないでしょうか！？

迷わずその人を力の限りにぶっ飛ばし、あたしは一目散に駆け出した。100M14秒、そんじょそこらの男性に負けたりなんかしませんよ。そう思ってた少し後ろを振り返ると、その人はマジな顔して僕を追いかけてきてた。正直、背筋が凍りましたとも。一瞬怖すぎて涙が出てきてしまうかと思いましたがとも。怖すぎて、思わず持ってた荷物も取り落としましたとも。高校2年生、16の春の出来事。

そんな事を思いながら、冒頭な感じです。

一応僕の今の現状をわかっていただけただろうか？かれこれ30分ほど逃げ回ってそろそろ疲れてくるそんな感じです。学校から逃げに逃げて入り組んだ道を走りに走り、自宅に着きました。や、本当に疲れて何人か人にぶつかっただけど気にせず謝らずに帰ってきました。

「ただいまぁ・・・」

誰も帰っていないと知りつつ言うこの言葉は、どこか虚無感に溢れて何だか自分が悲しく思えた。でも、人間慣れって怖いもので何も感じなくなつた。何も思わなくなつた。人間、それが一番悲しいっていうのもわかりつつあるけれど、でも、修復できない感覚つてのもあるものだから。

「やめよ……」

独り言つて本当に悲しいな、と思いつつ、二階の日当たりのいい自分の部屋の扉を開ける。

「やあ、伊瀏ちゃん！勝手に入らせてもらつたよ！」

迷わず、迷わず扉を閉めて自分の眼を擦り、耳を何度か叩く。きつと走りすぎて疲れたんだ。そう自分に言い聞かせ、もう一度ドアを開けると、そこには僕のベットにまるで自分の部屋かの如くくつろいでいる、さっきまで僕を追いかけてきていた変な人がいた。

「不法侵入で訴えてもいいですか……?」

人間パニックを通り過ぎると冷静になるものなんです。

とりあえずそう呟くと、その人は僕の言葉を冗談ととつたのか、とりあえず笑つていた。ム力つくと思いつつその人を見ていると、ふと見覚えのあるバックを僕に差し出してきた。……え？

「それ……それ僕のカバン……」

「まさか放り投げてさっさと行つてしまふとは思わなくてね！場所

はわかっていたから、勝手に部屋に入って君が帰ってくるのを待っていたのさ！」

ああ、そう……。力なくそう呟きながら、僕はその人を観察してみた。先ほどまで走ったとは思えない程その人からは汗も呼吸の乱れも見られなかった。どういうことですかね。僕はこんなに汗だくで呼吸も乱れに乱れまくっているのに。

「……。何々ですか？アンタ」

尋ねると、彼はすごい勢いできょとん、とした表情になり、ああ言うてなかったなあ、と小さくだけ呟いた。

サングラスを取るその綺麗な仕草。優雅であり、洗礼されたようにも思えるその仕草に、少しどきっとした。

「僕は、まあ……。わかりやすくいうと神様デスヨ」

この人の頭がおかしいんだと、すごく思ったかった。や、思うしかないでしょう。普通は。

「君に惚れたから。思わずやってきました、お仕事放棄して」

竹内伊瀏、16歳、高校二年生。女。自分で言うのもなんだけど、もの凄い平凡な女子だと思う。

高校二年生の春、カミサマはやってきた。

春、出会い。(後書き)

カミサマは不器用。を楽しく読んでいただけたら光栄です。
文才ないですけど、最後まで読んでくれたら嬉しいです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8186a/>

カミサマは不器用。

2010年12月22日14時16分発行